2025 年3月 2 日 降誕節第 10 主日礼拝メッセージ

「大切にすることは何か」　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 6 章 16−21節

「あなたが大切にしている物や、大切にしていることは何ですか」と質問されたら、皆様はどのようにお答えになるでしょうか。ご存知の方もいるかもしれませんが、よく研修会などで自分自身の傾向や価値観を知るために、「自分が大切にしている物やことを 10 個、紙に書き出して下さい」というようなワークをすることがあります。10 個書き出したら、次は「それを半分にしてください」と指示されます。つまり 5 個しか残せないというわけです。これを「船が難破して救命ボートに乗るのに、持ち物を手放さないといけない」とか、様々な場面設定をしながら行うと、受講者たちも盛り上がります。さて 5 個になったら、次はその残された 5 個の中から、一つ、また一つと手放して行き、「最後に一つだけ残した物が、あなたが一番大切にしている物、価値があると考えている物です」というような自己分析のワークです。

これはあくまでも「もしもそうなったら、どうしますか」という仮定の話ですが、私たちの人生、生涯というものを、生まれてから死ぬまで、長い目で見れば、それこそ第三者的に遠い所に立って俯瞰して見てみれば、「手に入れた物を手放すことのない人は誰もいない」ということが分かります。言い換えれば、誰もが握り締めていた物を順番に手放して、手放して、そうして神様の御許に還っていく、と言うことが出来るでしょうか。誰もが裸で生まれ、そうして裸で土に還っていきます。とはいえ、この世で生きている間は、着る物も住む所も必要ですし、もちろん食べる物も必要です。だけれども、必要以上にこだわり過ぎることはない、握り締める必要もなければ、貪る必要もないということなのかもしれません。

もう 10 年以上前に、出版・翻訳された本になりますが、『死ぬ瞬間の 5 つの後悔』という本があります（2011 年出版。日本語訳 2012 年）。オーストラリアで長年、緩和ケアに携わられていた看護師・介護士であったブロニー・ウェアさんが書かれたものです。彼女は多くの方々の看取りに携わって来られた中で、多くの人が口にする「人生の後悔」が 5 つのことに集約されるということに気付きました。その 5 つとは、「①自分に正直な人生を生きればよかった」「②働き過ぎなければよかった」「③思い切って自分の気持ちを伝えればよかった」「④友人と連絡を取り続ければよかった」「⑤幸せを諦めなければよかった」なのだそうです。

手に入れた様々な物は、やがて手放さなければならなくなるとはいえ、最期まで手元に残しておきたいと思っていた物は、実は既にどこかに失くして来てしまっていた。残された時間がわずかとなってしまった時に、改めてそのことに気付いて後悔する人が多い……。この本が、英語圏だけに限らず、世界中で様々な言語に翻訳されて、反響を呼んだのは、様々な物に追い立てられている現代社会において、多くの人々がそのような後悔を感じている、ということなのだと思います。失ってしまってから後悔するのではなく、今、大切に出来る間に、大切にしておくこと。この本はそのことを私たちに伝えているのではないでしょうか。

さて、今回の聖書は、「断食する時には」というお話と、「天に宝を積みなさい」というお話の 2 つのお話でした。「断食」と言っても、現代の日本においては、あまり馴染みがないかもしれません。ですが、宗教的な目的のために、一定の期間、一定の飲食を自発的にしないという行為は、世界中の諸宗教で見られることです。恐らく、「飲食という自分事よりも神様のことを優先する」という宗教的敬虔さの表現であったり、生命維持に不可欠な食事が摂れなかった時に、食事が与えられた恵みを記念し、定期的に思い出すためであったり、その動機や目的は様々なものがあるのだと思います。それこそ日本でも「これから一生、卵を食べません。お酒を飲みません。だから、子どもの病気を治して下さい」というような、いわゆる「願掛け」がなされることがあるというのも、同じようなことだと思います。

福音書を読んでいると、当時のユダヤ教では断食が日常的に行われていたことが記されていますし（マタイ 9：14、マルコ 2：18－20、ルカ 18：12）、『使徒言行録』によると、最初期の教会の中でも断食が行われていたようです（13：13、14：23）。また現代の教会でも、イエス様の十字架への受難を覚えるという意味から、今週から始まる「受難節」には、その始めと終わりにある「灰の水曜日」と「聖金曜日」には食事の回数を 1 日 1 食にしたり、「贅沢をしない」ということで、お肉を食べないようにしたりする教会もあります。

ですが、この「マタイによる福音書」6 章 16－18 節で、イエス様によって述べられていることは、「断食をするかしないか」「どのようにするか」ということよりも、「もっと大切なことがある」ということのように思います。「断食するときには、偽善者のように暗い顔つきをしてはならない」（16）というのは、このお話の前にある「施しをする時には、偽善者のようにしてはならない」（6：1－4）や、「祈る時には、偽善者のようであってはならない」（6：5）というお話に連続する形で述べられて

います。つまり、他人に見てもらい、他人から「さすがだ、立派だ」と評価されることを求めて、またその評価に満足していては、本末転倒だ、ということでしょう。

そもそも「マタイによる福音書」5 章～7 章にかけての「山上の説教」として、イエス様が様々なお話を語りかけられた相手の人たちは、「色々な病気や痛みに苦しむ者、悪霊に取りつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など、あらゆる病人たち」（4：23－25）でした。ですから、恐らく普段から定期的な断食をしたり、施しをしたりなんて、とても出来ないような貧しく、余裕なんてちっともないような人たちでした。

「ルカによる福音書」18 章 10～14 節には、「ファリサイ派の人々と徴税人のたとえ」がありますが、そこでは「週に 2 回の断食して、全収入の 10 分の 1 を献金している私は、罪人ではないことを感謝します」と自信満々にお祈りしているファリサイ派と、世間からも「罪人」と見なされ、また自分自身でも自分を「罪人」と認めて苦しんでいる徴税人とが、対称的に描かれています。イエス様が「山上の説教」で語られた人々も同様に、世間から罪人と見なされていた人たち、社会の中で弱く小さくされ、自分たち自身でも自らを罪人と卑下せざるを得なくさせられていたような人たちでした。そのような人たちに対して、イエス様は「断食で大切なのは形ではない」と言われました。

そもそも、「断食の形骸化」は、イエス様の時代よりもずっと昔から、いつの時代でも常にあったことであり、それを預言者は批判しています。「イザヤ書」58 章 6－7 節には、「[6] 私が選ぶ断食とは／不正の束縛をほどき、軛の横木の縄を解いて／虐げられた人を自由の身にし／軛の横木をことごとく折ることではないのか。[7] 飢えた人にパンを分け与え／家がなく苦しむ人々を家に招くこと／裸の人を見れば服を着せ／自分の肉親を助けることではないのか」と述べられていて、社会正義と社会福祉の両方の実践こそが、神様が全ての人に望まれている生き方として、本当の断食なのだと記されています。自分は律法や慣習の定め通りに断食して、献金し、また教会の礼拝に欠かさず出席して、献金のみならず様々な奉仕も熱心に行っている。そして、そのことを誇ったりして、周囲から評価されることを喜び、さらには断食出来ない人、献金出来ない人、礼拝に出席出来ない人、奉仕の出来ない人を責め、批判する。もしも、そのようなことがあるのだとすれば、そのような他者を抑圧する姿勢こそが、打ち砕かれるべき悪であるというわけです（イザヤ 58:6）。

後半の「天に宝を積みなさい」も、この言葉が語られた人たちが、宝も富も持っていなかった人たちであったということを踏まえて、改めて読んでみるとどうでしょうか。「この地上における物、衣食住にお金をかけるのではなく、神殿や教会に献金しなさい。神様にお金を献げることが、天に宝を積むことです」とは、間違っても読めないはずです。私たちは毎週の礼拝の中で、感謝と献身の徴として「献金」をしていますが、現代のような貨幣経済が広がる以前の元々は素朴に「献げ物」であり、野の獲物や畑の収穫物を与えて下さった神様に感謝し、それを礼拝を通して、隣の人たちと共に分かち合うという所有物（富）の再分配の機能を果たしていました。また「天」とは、空の彼方、遥か上空という意味ではなく、「神様が働いておられる場所、空間、次元」のことですから、「天に宝を積みなさい」とは、先程もお読みしました「イザヤ書」58 章 7 節の言葉「飢えた人にパンを分け与え／家がなく苦しむ人々を家に招くこと／裸の人を見れば服を着せ／自分の肉親を助けることではないのか」そのものだと言うことが出来ます。

今、私たちが手にしている様々な物は、分かち合うために与えられた物であり、決して自分一人で握り締めるために与えられた物ではないということ。そして、そこには衣食住という目に見える形、富、財産だけではなく、目に見えない様々な能力や才能、また人と人とのつながりというものも全て含まれるのではないかと思います。

本当に「価値のあること」「大切なもの」、「大切にするべきこと」とは一体何か。今度の水曜日、3 月 5 日（水）から、今年のレント（受難節）が始まります。4 月 19 日（土）までの約 6 週間にわたるレントの期間は、イエス様の受難、十字架の意味について思いを馳せるだけではなく、その生き様、生涯について考え、また私たちがイエス様に従うとはどういうことかについて考える時です。神様が私たちに望まれている生き方、人も自分も互いの命を大切にし合い、後悔のないように生きられるように、私たちは今日も神様と共に、ここから導かれ、背中を押されて歩み出して行きます。